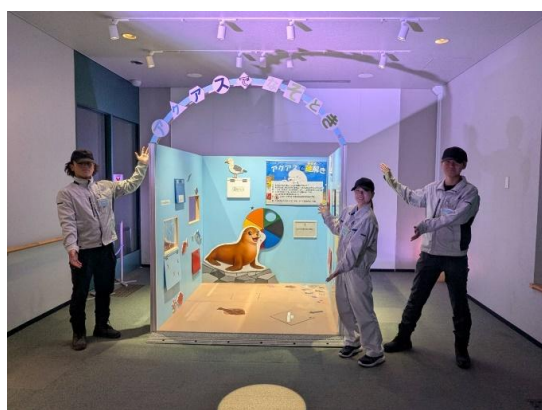


島根県立しまね海洋館 水族館は海を学び、伝える場

実施期間：2025年8月1日（金）～2026年3月15日（日）



【事業の内容・目的】

- 島根県立しまね海洋館を、学びを形にして人に伝える学習と発信の場として活用し、多様な人の学び合いの場となることを目指した。
- 魅力あふれる海の生き物についての学習、わかりやすく伝えるための工夫などを通して、生徒・学生が海・生物についての学びを深めた。
- 障がい者を含むすべての来館者にとって学びやすくわかりやすい情報提供をすることができ、海の学びを深めることができた。

活動の様子

1. 浜ろう生が伝える 海の生き物・水族館

【開催日時】2025年8月～2026年3月

【開催場所】島根県立しまね海洋館 観覧通路、島根県立浜田ろう学校

【参加者数】約11,700人（展示期間中の来館者含）

【活動内容・目的】

- 館内解説の手話動画を聴覚障がいの当事者であるろう学校の生徒が提案し、水族館、ろう学校、関係機関で連携して制作した。
- 手話言語を使う方になじみやすく、海について学びやすい環境となった。



動画上映の様子①



動画上映の様子②



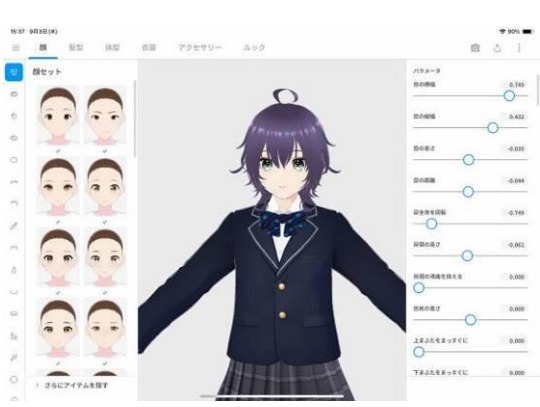
打合せの様子



解説場所の選定①



解説場所の選定②



生徒がデザインしたアバター

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

誰にとっても学びやすい施設となるよう、聴覚障がいの当事者であろう学校の生徒が提案し、わかりやすく親しみやすいサイン（手話）動画を共同制作した。水族館で伝える素材について自ら学び、解説内容を組み立てた。顔を出すことに抵抗があるといった様々な特性の生徒が参加できるよう、地域デジタル拠点の機材と技術を活用し、生徒の動きをアバターに反映させた動画を作成した。多様な形で社会参画できることを生徒が体験できたとともに、当事者が提案することで実態に合った海の学びを提供することができた。

【参加者の声】

- 生徒のがんばりと地域の協力がよかった。
- ろう者にとって分かりやすくなるのは良いと思う。浜田の住人として海を大事にしたい。
- 海の生き物を科学的にほり下げるのは楽しい！
- モニターがわかりやすかった。
- 地元のろう学校の生徒から学べたことがよかった。生物の大切さ、学びの場の必要性を感じた。

【生徒の声】

- 魚や海について知るきっかけになった。島根の海についてより深く学ぶことができた。

2. 僕らの学びを来館者へ 骨格標本の制作と発表

【開催日時】2025年8月～2026年3月

【開催場所】島根県立浜田水産高等学校実習棟、島根県立しまね海洋館

【参加者数】約1,500人（展示期間中の来館者含）

【活動内容・目的】

- 水産を学ぶ生徒が魚の骨格標本とその解説を作製し、当館で展示した。
- 生徒は水族館スタッフの指導を受けながら骨格標本を制作し、細部の描画や標本の記録写真の撮影を行った。これらの作業を通して、水生生物について詳細に学ぶことができた。



水族館で打合せする様子



生徒が来館者へ解説する様子



リュウグウノツカイ液浸標本展示の様子



リュウグウノツカイ骨格標本展示の様子



骨格標本制作の様子



液浸標本制作の様子



接写・詳細部位観察指導の様子



完成した標本

水族館からは、水産有用種ではないことから入手困難なリュウグウノツカイなどを提供し、水族館ならではの素材を活用して標本を制作した。

生徒は水族館スタッフの指導を受けながら、骨格標本を制作した。学術的なアプローチとして細部の描画や標本の記録写真の撮影を行い、これらの作業を通して水生生物について詳細に学ぶことができた。

また、骨格標本を展示するケースを島根県立江津工業高等学校が制作した。それぞれの学校の特色を活かした展示として協働することができた。

水族館を活用して発表の場を設けることで、わかりやすい解説の作成など生徒の学びを深めることができ、生徒の学びを多くの来館者と共有することができた。

【参加者の声】

- 水産高校の生徒の学びを、水族館を通して一般の人に海を学んでもらえたらいいと思った。
- （リュウグウノツカイの）長さがすごかった。大きい生きものはすごい。

【生徒の声】

- 海にはたくさんの生き物がいて、骨や関節の構造、魚類による特徴を実際に触れながら確認でき、生き物の仕組みを立体的に理解できた。
- 骨格標本を作製するにあたって海をもっと知りたいと思えた。

3. 僕らの技術で学びのお手伝い

【開催日時】2025年8月～3月

【開催場所】島根県立しまね海洋館、中国能開大島根校

【参加者数】約27,000人（展示期間中の来館者含）

【活動内容・目的】

- 工学や建築を学ぶ学生が、その技術を活かして生物の生態を伝える制作物を作成した。それを館内で展示し、来館者にその成果を発信した。
- 学校の特色を生かし、強みを発揮しながら発信のための工夫をすることで学生の学びを深めた。
- 水族館を拠点に海についての学生自身の学びを多様な人と共有できた。



完成作品（なぞとき BOX）



なぞとき BOX 制作風景



なぞとき BOX 体験風景



バブルリング発生装置試作指導



制作風景①



制作風景②



完成作品（バブルリング発生装置）



展示の様子

生き物についての学びが深まるような制作物を学生が考案し、作成、展示した。

住居環境科の学生は木製の「なぞときBOX」を制作し、来館者が楽しく海の生き物について学べるような展示を行った。生産機械技術科と電子情報技術科の学生は水中で渦輪を作る「バブルリング発生装置」を制作し、シロイルカの特徴的な生態とともに解説した。

来館者が操作して体験的に学べる制作物を水族館に設置することで、多くの来館者に生き物について深く、楽しく知ってもらうことができた。

【参加者の声】

なぞときBOXについて

- なぞを解いてく中で、海の生物に興味を持つことができた。
- なぞとくにしたことでも大人も子どもも、たのしめるのがいいなと思いました。
- めくったりあわせたりしていろんな海をかんじました。
- うみのいきものたちはこうやってくらしているんだと思いました。
- 海のことがもっとすきになった。

バブルリング発生装置について

- もっと知りたくなった。みんなに教えられる人になりたい。
- バブルリングができるのがすごいと思った。
- はじめて見てすごいと思った。

【事業全体のまとめ】

学習者の学びをアウトプットする場を設けることで、学習者の学びが深まると同時に、受け手側も新たな視点で学ぶことができた。また、ろう学校の生徒が学びを共有する取り組みを行ったことで、当事者にしかわからないことも多い聴覚障がいへの理解も深めてもらうことができた。

また、水産や工学等を専門的に学ぶ生徒・学生が海や生き物について学び、学びの専門性を活かしながら発信のための工夫をした。その成果を来館者と共有することができ、双方にとって深い学びとなった。学校だけでは実施することのできない、水族館ならではの特色ある学びとなった。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 島根県立浜田ろう学校	手話監修、サイン選定、当事者視点での動画監修、提案
2. 島根県立浜田水産高等学校	骨格標本制作、サイン作成、解説
3. 独)高齢・障害・求職者雇用支援機構 中国職業能力開発大学校附属島根職業能力開発短期大学校（中国能開大島根校）	展示物制作、解説
4. 一般社団法人イワミノチカラ	企画設計・制作進行、全体調整、広報、動画編集、技術サポート、アバター制作、江津市デジタル拠点との協働
5. 島根県立江津工業高等学校	標本ケース作成

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 山陰中央新報朝刊	「展示生物 アバターが紹介」令和7年10月25日（土）
2. 山陰中央新報朝刊	「ものづくり成果発表」令和8年2月11日（水）
3. 中国新聞朝刊	「アクアスの生き物 手話で紹介」令和8年2月27日（金）
4. 山陰中央テレビ	TSK Live News イット！「アクアスのシロイルカ『バブルリング』どうやって？学生が開発した装置で発生仕組み紹介（島根）」令和8年3月10日（火） https://www.fnn.jp/articles/-/1013225
5. 読売新聞朝刊	「シロイルカの技 再現装置」令和8年3月13日（金）
6. 山陰中央新報朝刊	「シロイルカ顔負け アクアスに発生装置展示」令和8年3月13日（金）
7. 中国新聞朝刊	「『バブルリング』再現 江津の学生『シロイルカ見て関心』」令和8年3月20日（金）

以上